

潮出版社

9

平林たい子全集

平林たい子全集 9

昭和53年1月20日 印刷

昭和53年1月25日 発行

著者・平 林 たい 子

装 幀・伊 藤 憲 治

発行者・富 岡 勇 吉

発行所・株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋3-1-3

電話 東京(03)230-0741(販売部)

230-0781(編集部)

郵便番号 102

振替 東京5-61090

印刷 第一印刷株式会社 製本 株式会社 鈴木製本所

© 1978 Shinko Teshirogi Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします

目次

開票……………	7
さしも草……………	12
痩せた女……………	24
不毛……………	32
黒い夫……………	100
ローザの愛情……………	110
他人の幸福……………	123
妻の世界……………	129
たたずむ女……………	135
黒い年齢……………	231

イルミネーションの島	244
犬と人々	252
熊	262
黒髪秘密	276
早春雨後	282
リンデン樹の下で	295
貴族	301
宇品ちかく	312
母という女	320
行く雲	330

良人の求婚	339
秘密	344
足のわるい男	362
鉄の嘆き	372
エルダよ	444
美人	452
明治の廓	460
解説・瀬戸内晴美	472

平林たい子全集

開 票

はじめ私は、その選挙のころには旅行に出る予定を立てていた。が、選挙がはじまった頃、気持の中の矛盾が解決してだんだん清田いづみに投票することに気持が固まった。自分の一票なぞ問題ではない。けれどもやはりそれは、私の信念の象徴であった。そのうち中途からは、手近な親類を投票に誘うため東京に移動とどけをもって来ているかどうかがききに行くまでに熱心な清田支持になっていた。もし東京に選挙権があるなら、その政治無関心の一家をタクシ―にのせてでも投票に引きつれて行く熱意がふつふつと胸に沸いた。調べた結果選挙権がないことがわかってその情熱は遂げられなかったけれども。その頃電話をかけて来る知人があると、右手で電話器を耳に当てながら、左手で壁に下っている番号簿兼用のカレンダーをめくって相手の住所を電話の最中でも調べた。

「もしもし私達と同じ区に住んでらっしゃるわね。こんどの選挙には誰かきまっていますか？」

と私は言いかけた。その次の言葉を私からきかない間に、相手が、

「貴女の推せんしている人に投票しますよ」

と言ってくれたこともあった。勿論当惑そうな返事をする人の方が多かった。それはむりないと思う心が私にはある。けれども私のそれをたずねる口調には切実なものがあった。

夫婦で遊びに来たある知人は、時節がら選挙の噂をして、ある党の某候補が真面目そうだから入れることにきめた、と話した。私は抗しがたい思いをして、その品定めには同感せざるを得なかった。私は自分の複雑な気持はその場で言うにたえなかった。

私自身清田いづみ女史は昔から嫌いであつたからながい間には清田女史に対する評価をこの夫妻に伝えたこともあるにちがいない。三十年も前だけれども、私の夫が市会に立候補したおかげで、清田女史の夫君が落選したことがあつた。

「清田氏を落選させただけでこの選挙は価値があつた」

と若気の私が口ばしつたのをいまもはっきり覚えてい。私には清田氏が落選したことで、自分の夫の落選が償われるように思われた。それ程清田氏を嫌つたのには、いろいろ理由があつた。が、一つには清田いづみ女史の旦那さんであるということが重要なことであつた。

清田女史は、若い時から非常に美しく、メーデーの行列の中にいた彼女を見て私の夫が、

「ちよつとない美人だね」

と讃歎したことがある。勿論、そんなことからの嫉妬で

清田いづみ女史に反撥したわけではない。そのときにも、夫は、そのあとに、「お尻の形が云々」といったことをつけ加えて、嫉妬どころか彼女に対する私の気持ちをさらにわるくさせる影響を与えた。女のお尻の形についての感覚は女同士ではわからない所がある。そのためこんなことでは夫の言うことが「なる程」とよく私の耳に入るのであった。私はながい間彼女に、「皇后陛下はだし」という綽名をつけていた。が、それは、皇后のある一部分、たとえば、ネックレースのかけ方などの共通点を指しているものであって、私は、彼女が女給あがりだ、ということを決断に忘れていなかった。

それは昔、清田夫妻の住居から近い所に住んでいた友人が私に教えたのだが、彼女は、女給として、カフェで清田氏と知合いになったのだという。この知識が、私の清田いづみ観の全土台になっていたことは否めない。夫が彼女の美貌を言っても、お尻の形のことを言っても、私の中ではみんなそれが、そのことと結びついて、どうしても、彼女を政治家の資格のある人間だと思ふことができないのであった。

しかし、さっきしるした夫妻の友人は、私の所を出てから、近くの電話で清田いづみに投票することに変更したから、とわざわざ知らせてくれた。私は感謝して、いくどもお礼を言って電話を切った。私の清田いづみ支持は、その時から何か悲劇的様相を帯びていた。

その頃私の中で清田いづみの影像是だんだん変わって行った。人間の心理はおかしいものである。それというのも実は私は彼女の属する勤労党を支持することにきめていたからである。この支持について友人の中にはそうはつきり言切らない方がよいと忠告した人もあったし、そういう思慮が私自身にもあった。が、勤労党の弱勢が不惑で何かプラスするならという気持ちになって行ったのはごく自然だった。それに知識人に少ない勤労党支持者であるために支持の弁をきかれることが非常に多く多少不本意ではあったけれども、私の勤労党支持はだんだん内と外からはつきりしたものに変わって行った。それと一緒に清田いづみ嫌いが、徐々に清田支持に変わったのは、ふしぎなようで当然なことである。

彼女の選挙公報もはじめて熟読した。女給のことがかいてなかったのは選挙公報だから当然なことであろう。が、そうかいてない所を見るとあの話はうそであったかも知れないと思うようになっていた。彼女が女学校を卒業しているということもその公報で発見した。女学校出の女給は多いものだが、彼女の場合だけ女給でなかった証拠のような気がしたのは凡人の心理変化のきつかけとはおよそこんなものだという典型みたいなものである。

彼女は美人だから、選挙ポスターにも写真をのせていた。はじめ、いくらか目をそらし気味に、そのポスターを見てとおったのに、いつのまにか親しみをもつようになった。

後にはもつと美しく刷れたのに、と印刷効果のわるいのを残念に思うようになった。

この前の選挙にも、その前の選挙にも彼女は、私に無断で私を推せん人にしていた。そのたび私は憤ったが、それほど角をたてることもできず、そのままにしてしまった。こんどの選挙の前にはこんどこそもし彼女がそんな印刷物でもつくったらできたあとでもことわろうと肚をきめていた。しかし、できてからことわるのは残酷すぎるから、つくらないうちに、ことわりを申込む方がよいとも考えた。が、こんどもまた私の名をつかうかどうかわからない所へそういう申込みするのは技術的にちょっとむずかしい。私はどうしたものかと考えあぐねていた。

そこへある日、当の清田いづみ女史と選挙の責任者とがそろってたずねて来た。用向は、名をきいただけで直感して、私は面をくもらせながら応接間に出て行った。

「実はお願があつて来たんですがね……」

と言いはじめたときもう私にはすべてがはしった。

彼女は、この前のときも、その前のときも無断で名前をつかったことを自分で知っていた。ちょうど三度目のこんどもまた無断使用したら、どんな目に遭うか知れないということを知っているのである。ちょうど私の考えていたことと、裏表からびたりと符合していた。

私は仕方なく承知した。承知する以上苦い顔をしていても仕方がないと思つて彼女達が靴をはく時、

「御奮闘をいのります……」

と口の中でもぞもぞ言つた。これが、私の全身からしぼり出したせいぜいの言葉であつた。その時も彼女は美しかった。やっぱり私は女給あがりということを思つていた。

彼女が一人の外套をとるのを待つ間、

「厚生年金のことでアピールするととても手応えがあるんですよ」

と玄関に立つたまま言つたとき、「ほほう、女給さんにも年金のことを人にアピールすることができのかな」とと感心した。そして、案外思つたほどでもなく彼女はやれるのではないかとも思つた。

このプロセスと、私が勤労党支持に信念を凝固させたプロセスとは並行していた。

いまや、私は清田いづみの百パーセントの支持者である。それに、そうでなくてはならないのである。私はその転換のためには相当苦しんでいた。

その転換を一番容易にしたのは、ある日突然こんなことを考えたからである。

「私もかつて女給であつた！」

このことをいままで忘れていたことについて私は深く自分を恥じた。人間は何と都合よくつくられているものだらう。自分は見えず他人ばかり見えるように神がつくり給うたおかげで人間はぬけぬけと生きられるのである。勿論私が女給であつた日は忘れるほどほんの少々である。彼女は、

その仕事の場で夫の清田氏をさがしたというのだから、恐らく私よりもずっと永い間その仕事にいたのにちがいない。が、ながい短いがこの場合そんなに問題でないことは当然である。彼女をそのことで軽蔑するなら、自分も軽蔑すべきであろう。——こういう思索の順序にしたがってこの問題は心の中で終った。つまりは、自分を肯定する力で相手も肯定しようと決心したのだ。

私は、次第に、いわば彼女を愛しはじめているのである。愛情とはこのような土台の上に、このような条件によっても発生する。だが、ここで私が発見することは、彼女への愛が実は自分への愛だということである。すべての愛情が、ほんとうはこんなものなのだろうか？

ある日には、誰か訪問者の口から彼女の選挙が危いと告げられた。勿論私は、そのことをはじめから知っていた。推せん者になるのがいやなもの、一つにはその思慮があったからであった。

ところが、その「危い」ということをきいたとき、その人が、

「一日二日一緒に自動車にのって貰えませんかねえ」

というとき、私は、のる他仕方ないような余儀ない気になっていた。彼女に落選されては私が大変であった。勿論、いままでの気持のなりゆきを考えると、皇后陛下はだしの女史と一つの自動車にのって、頭をべこべこさげる光景は、あまりに愚かしく想像できた。しかし、いまの自分はそん

なことは問題でなかった。その恥とこの恥とを天秤にかけてみるとこの恥の方がずっと深く大きいのである。

その選挙運動の近くににいる者が自分の候補者に限り当選するような気になってしまふのは、ごく普通の選挙心理であった。私には、そういう心理の徴候さえ見える。もう一息で何とかなるのではないか、と私はやきもきしているのだ。

しかし、そうこうするうち、投票日になった。天気は晴れていた。私は、朝のうち、やや遠い投票所に出かけて行った。近所に彼女のポスターのないことではいつも残念がつていた。家の塀に一枚はるように選挙事務所に申込んだのに、誰ももって来なかったことなどもうきょうは過去のことになった。

私は時たま会う彼女のポスターと顔を見合わせて目まぜするような気持で歩いて行つた。非常に親しみながらやっぱり彼女に対してある気持は捨て切れないのである。

投票所から何メートルという規定の距離の場所には、どこからもって来たのか、四枚並べて彼女のポスターがはつてあった。その賢さをよしとして、ややたのしく投票所の学校に行つた。が、尚かつ気持が苦いのは、勤労党への世間の予想があまりに悪いことからであった。そして、その予想を私も肯定していたからであった。

投票所で立会人の一人が立って私に挨拶した。私はびっくりした。あとで、清田いづみ派の人だったろうと解釈し

だが、歩きながら考えてみると、こないだ清田女史と一緒に推せんをたのみに来た人であった。あのとき、自分は、訪問者の顔さえ見ないほど彼等の来意に当惑していたのであった。

その日一日中、選挙が気持の中に何かがいリズムをつくった。他人の選挙がいつのまにか自分の選挙になっていた。私は清田いづみを両肩で負っているのであった。

よく、選挙の寄付や演説をたのまれると、私は、

「そんなことをする位なら、自分で立候補しますよ。まるで当選のない立候補みたい」

とうまくもないしゃれを言った。それは、自分があの苦しそうな、そして愚かしい候補者というものでなかった幸福感から言えるのであった。その軽やかな気持を自らすてて、こんな風に立入って行くとは何と、ばかげたことだろう。

もう私は、この選挙を自己の肉体をとおさない他人事として語ることはできない。その晩のうちから、家族の者をしりぞけて、私はテレヴィを独占した。私は候補者であった。

はじめは地方のわずかな票の集計が意味なく横書きに現れていたが、一万台を越しはじめると、当選圏に迫る候補者が現れた。

私は息をのんで坐っていた。だんだん夜ふけに近くなっていた。家の中は静まった。室の中には私と選挙があるだ

けであった。そのちらちらする青白の光は、凄惨な像を結んで私を脅迫していた。この怪奇劇は私一人のために演ぜられているかのようにだった。

夜がふけると画面も人の声も白くぼやけた。反射する白い光は、ただ私の顔や着物の上で動いた。その光の中で、勤労党の候補者は苦闘していたが殆ど死に絶えたも同然であった。何百人の候補者の哀楽は、彼等の屍の上で演ぜられていた。ここで私がひそかにこんなに必死にその圧力と重みに堪えているとも知らずに彼等は死んで行く。清田いづみ女史の開票はあす朝からはじまる予定だと知っていたが、もう疾づくに私の中では死んでいた。

私はよろめきながら便所に行って頭をかかえた。かえつてくると毛布をかぶってねてしまった。

さしも草

夫がお灸を商売にしはじめたのは去年からです。

「……さしも草さしも知らじなもゆる思いを——さしも草
って何のことか知っているかい」

「知りませんネ」

「よもぎのことだよ。よもぎは実に有用な草だ。たべてよし、傷につけてよし、もぐさにしてよし——日本人は昔から
ずい分よもぎのおかげになつたらしいね」

私にはそんなことは興味がありません。

「なにを急に言い出すことかと思えば……」

私の口調は夫の人なつこそうな調子とは正反對に索漠としたものでした。夫はこんな妻のあり方にはなれた年齢で、別にそれ以上説明をきいてもらいたいわけでもありませんでした。机の上を見ると、その頃にはいつも和綴じの本がのっていました。ある頁には、人体の気味わるい裸の図があつて、各部分を赤青の線でわけた中に、むずかしい漢字の名称がついていました。夫はお灸を研究していたのです。学校では組合の責任者になつてゐるのに、だんだん夫はお灸の研究に深入りしました。暑中休暇の半分は学校関係の研究會に出るけれども、のこりの半分は奈良の山奥までお

灸の講習をうけに行つて、山寺にこもりました。その後、一度となりのおばあさんの坐骨神経痛のために、背中から腰のまわりをあちこちとお灸してやったことがあります。「つまり、ソヴェトの皮膚の移植療法と同じ原理だね、白血球の抵抗を刺戟するのだ」

夫はつぶやきました。その頃は、夫や同僚たちの会話によくソヴェトやそんな種類の話題が挟まりました。私たちの家のすぐ近くにある警視庁の第何方面部隊という建物を二階から見ながら、

「革命が起きたら、さしずめあそこは託児所だな。庭が広くて子供を遊ばせるにはむきだ」

と言う客もありました。私は、そんな話題にもいたつて無関心でした。

ですから、お灸とソヴェトの何とか療法とをくらべた彼のつぶやきも耳のそばを通りすぎただけです。それよりも、となりのおばあさんがお灸をしてもらつたあとと着物を着直してかえると、

「あの位の年齢になると、乳房はまるで糊濾し袋がぶら下つてゐるようだね。気味がわるかった」

と告白したのが、いかにも滑稽で、大笑いしました。が何の気もなく笑つたあとで、男は、あんなお婆さんの乳房まで特別な目で見てゐるのかということを思ひました。こんなことまで言うのはどうかと思いますが、夫は非常な乳房好きなのです。私が夜ねるとき、下着をぬぎブラジャー

をとって浴衣を着ようとすると、いきなり駆け寄って赤ん坊のように吸いついたりするのです。

はじめは興味で研究していたお灸がいつのまにか内職になっていました。月に三千円位の金がよくい入ってくるのは、非常に便利なことでした。本来私は金づかいがあらう方だし、夫は月末に私のしるした家計簿にそろばんを入れ直してみるほどのしまりやなので、時には、こっそり利息の出る金をかりて帳面づらを合わせていました。が、余禄が入ってくるようになってからは、月賦でその頃は買った大きいオールウェーヴラジオや自転車をかいました。オールウェーヴラジオはその頃どこを廻しても朝鮮語の放送がよく聞こえました。が、夫は「北鮮だ」といって、しばしきき入るのです。夫は学校の勤務から買ったの自転車がかえってくる、しばらくスポークを磨いたりしてから、またそれに乗って、こんどはお灸に出かけます。

貯金が少しずつできていました。だんだんソヴェトの話をする来客もなくなり、かえって、教員組合の悪口をいう他校の教員が遊びにくるようになりました。夫は、苦しうにその男のいうことにも調子を合わせていました。が、組合の役員だけは決してやめませんでした。役員仲間がくると、やはりその仲間の気分にも調子を合わせていました。夫は、組合から都議会の立候補をすすめられていたようです。夫はしばらくその誘いとたたかっていたいました。しかし、夫の気持は、その頃、殆どお灸にうばわれていました。あ

ちここに、お客をつくって、二日おきとか三日おきとかに線香ともぐさと酒精綿の入った石けん箱のようなものをもって訪問するのですが、もうそんな口がいくつもできていました。

たまに近所のお客の細君が、

「今日は急に主人は出かけますから治療に来て下さっても留守ですが……」

と私一人の家にことわりになることがあります。

「すみません。学校からすぐうかがうようなことを言っていましたから、学校へ電話でことわって下さいませんか」

「そうですか。かまいませんよ」とその細君は私の顔を見ます。

「かまいませんよ」

と私は言います。私は非常に大ざっぱな女です。

あとで、夫から、

「何で学校へ灸の打合わせの電話なぞかけさせるのだ。学校には絶対に秘密にしているのに」

と叱られて、なるほどとはじめて気がつくのです。この頃から夫は、貯金帳を私からかくすようになっていました。

が、私はそれを氣にとめませんでした。夫は、その貯金の中から債券や株にちびちびと金を廻しているようです。ある午後新宿に買物に行った私は、株屋の支店の表で自転車の鍵をあけている夫を見つけました。

そのずっと前、私は、近所の奥さんたちが「ワリコウ」

熱にうかれてゐるのに煽動されて、夫に金をせびりました。すると夫が、

「ばかだな。この資本主義があと五年もつづくと思うのか。必ず何か起る。株や債券を買うほど愚かなことはないよ」とたしなめました。それから、かれこれもう五年位たっています。その間世間には案外何も起りませんでした。そして、変つたのは世間ではなく夫の方でした。夫が株屋に出入りするようになったのです。

しかし、この頃でも、夫は、年配であるし、やはり組合の役員ではありました。デモに出かけることもたびたびです。が、どこに行っても大いそぎでかえつて来て、お灸の治療に出かけます。

こういう日々のあいだのある日です。私はある日、夫はきかえたズボンのポケットから、ネックレスの一部分と思われる糸で貫いた人造真珠の粒を発見しました。

その前にも、夫が女持のハンケチをつかつてゐるのを見つけたのですが、

「ああ、これは生徒のだ。なアんだ。いつもって来ちゃったんだろう」

と夫が言うので、そうかと思いました。私は実は非常に焼餅やきのしつこい性格です。夫が、床にねた半裸の女性のそばにかがみ込んで灸をする姿態を想像してさえ、体がカッとすることがあります。が、またすぐ考えなおします。それというのも夫がとなりのブリキ屋に間借りしている人

の妾を見かけるたび、

「資本主義は人間の欲望を無制限に膨脹させるとレーニンと言っているんだよ」

というのをきいていましたから、資本主義のおかげで、ゴム風船のようにふくれたいたましい男女が坐っている想像で、私は自分がそうでない幸運を思いました。そうしてそういうプロテストをしたレーニンとそれを教えた夫に対しても、そのときには何かしんみりとした尊敬みたいなものを感じるのでした。

その頃、夫の灸治療の出先きでのいろいろな噂が耳に入っていました。ある土建屋さんの家では、奥さんのお灸のすむまでずっと旦那さんがそばについているということでした。そんな旦那さんの気持はわかりすぎるほどわかる筈なのに、夫は何かの話のはずみに、

「わたしはまだ青年の気持です。三十歳代の気持では切っていますよ」

と言ったということです。

「わたしはもう年だからだめですわね」

とでもいえば、土建屋さんも少しは気を許すだろうに、気の利かぬことではないだろうか、とその噂をつたえた人はつけ加えました。

私はそのとき首をかしげて考えました。夫はよく私にも自分は青年の気持だといいます。しかし、それは、勤務さきの若い先生と一緒に歩めない心の呻きのように、私には